

あの不祥事教授がまさかの「大本命」

東大医学部長選挙という「滑稽劇」

相次ぐ研究不正の発覚に揺れる

東京大学医学部で、注目の医学部長選挙が十二月に迫ってきた。教授の一人は「門脇孝・東大病院長が立候補するという噂がある」と言う。OBの中には「門脇教授こそ本命だ」という者まで現れた。

門脇孝とは、本誌が詳報した武田薬品が販売する糖尿病治療薬ネシーナの臨床研究「J-BRAN

D」での不正が指摘されている問題人物だ。独立公正に行うべき臨床研究であるにもかかわらず、門脇は武田から多額の講演料などを受け取ってきた。武田に利益誘導するための研究を行い、金銭等の恩恵に浴してきたのだ。

「長年にわたり、東大医学部・病院の要職を務め、昨今の腐敗を招いた張本人」（医療業界誌記者）と

いうのが衆目の一致した見方だ。こうした人物が、自ら犯した不祥事の責任をとらないばかりか、医学部長への「出世」を画策するのは、驚き呆れる話である。

結束固い「旧三内グループ」

本来なら無理筋の話を、背後で後押ししているのが「旧第三内科（三内）グループ」と呼ばれる集団だ。第三内科とは、明治時代に青山胤通教授が開いた日本最古の内科である。歴代教授は、日本医学界の要職に納まつてきた。

一九九八年、東大医学部は従来のナンバー内科制度を廃止し、循環器内科や呼吸器内科のような臓器別内科制度に移行した。この結果、第三内科は消滅したが、いまでも旧三内グループの結束は固く、東大医学部で隠然とした力を持っている。その旧三内グループの今

門脇だ。

今回の医学部長選挙は、本来なら無風で門脇が選出されるはずだった。現在、医学部長を務める宮園浩平は門脇の旧三内の後輩（八一年卒）で、分子病理学の教授だ。

東大の医学部長は、基礎と臨床分野が交互に選出されるため、「（宮園は）当初より、旧三内の先輩である門脇に禪譲する予定だった」（前出の東大医学部教授）とされる。ところが、ここへきて一連の臨床研究不祥事が発覚した。千葉大学時代に行ったノバルティスファ

ーマ（ノ社）の降圧剤ディオバンの臨床研究で不正を指摘されている小室一成・循環器内科教授、ノ社の白血病治療薬を用いた臨床研究で、患者のデータを無断でノ社に横流ししていた黒川峰夫・血液・腫瘍内科教授は、いずれも旧三内出身だ。彼らの教授選では、「門脇ら旧三内グループが暗躍した」（東大病院外科系教授）と言われている。今回の医学部長選挙では、彼らが門脇を担ぐ先兵となるはずだった。

しかし一連の不祥事で、小室に對しては千葉大学が二回も問題論



研究不正への反省は微塵もなく医学部長を目指す（門脇孝東大病院長と東大医学部）

文の撤回を勧告する事態となった。論文の不正が露見した教授は引責辞任するのが普通で、二回も勧告されるなど例がない。

不祥事のもう一人の主人公である黒川は、一連のメディア報道で意気消沈しているという。抗うつ剤を服用し、教授回診の日以外は大学にも殆ど出てこないのだ。このため、「教授決裁がいる仕事か溜まってしまふ」（血液・腫瘍内科医局員）という。黒川は以前から教室員へのパワハラで問題になっていた人物だ。事件以降は教室員の退職も相次ぎ、「もはや診療科としての体をなしていない」「前出の医局員」という。ただ、小室も黒川も辞任する様子はない。彼らに辞職を思いとどまらせているのが、他ならぬ門脇だ。門脇は、一連の事件に責任を感じ、辞職を申し出た血液・腫瘍内科の医局員に対し「このままでは旧三内がもたない。できるだけ、穏便に済むように調整しているから」と慰留に努めている。無論、門脇が穏便に済ませたいのは、小室や黒川の将来を思っていることではない。医学部長選に勝つためである。そ

れには、後ろ盾である旧三内グループの力はできるだけ温存しておきたい。加えて、小室や黒川が責任をとれば、自分も無傷では済まなくなる。

逮捕されない限り何をしてもいい

その思いは、旧三内のOBたちも同じだ。矢崎義雄・元第三内科教授は、自らの瑞宝大綬章の受章パーティーに小室を呼び、会場への挨拶の機会を与えた。参加した医師は「医学界の大物である矢崎教授が全面的に小室さんたちを支援していることを世間に印象つけた」と話す。

矢崎は政府の委員も務め、科学研究費や民間団体の研究費の分配に大きな影響力を有している。ある厚労官僚は「科研費や民間研究費の選考委員は、旧三内人脈で占められている」と話す。現に、昨年からの研究不正が問題視されている小室が、今春、文科省から総額一千五百九十九万円の新たな研究費を獲得したのは、このようなお手盛り運営のためだ。

現在、東大医学部内で、門脇らの不正を積極的に批判しようとする

る教授は見当たらない。前出の東大医学部教授は、「これまで教授会で、この問題が取り上げられたことはほとんどない」と言う。

元東大医学部外科教授は「なんでもこの機会に、三内を批判しないのか」と憤る。本来、外科と内科はライバルであり、旧三内の不祥事は、外科が徹底的に攻撃するのが自然だ。しかし、外科系にも骨のある教授がいない。外科系診療科の医局員は「旧三内は、製薬企業から豊富な資金を得て、霞が関とのパイプも太い。中途半端に批判すれば、自分たちが返り血を浴びることになる」と声を曇らせる。

東大医学部教授の関心事は、研究費と学界での地位、さらには定年後の再就職だ。特に定年間際の教授にとつて、再就職斡旋は何より魅力的であろう。最近、東大を退職した教授は、ナショナルセンターのような独立行政法人の理事長に「天下り」する者が多い。例えば、桐野高明・元脳神経外科教授は、退職後、厚労省傘下の国立国際医療研究センターに移り、同センターの理事長・総長を務めたあと、現在は同じ厚労省傘下で格

上である国立病院機構理事長を務めている。

これは、旧三内OBの矢崎が辿ったキャリアと全く同じだ。自らの将来を考えれば、妙な義侠心を出して、旧三内グループを敵に回さない方が無難と考えても無理はないだろう。

一昨年来の臨床研究不正で、責任者が辞職していないのは、もはや東大医学部だけである。京都府立医大、慈恵医大、滋賀医大では責任者は既に大学を去った。

プロフェッサー（教授）の語源は、ラテン語のプロフェス（神に告白する）だ。何よりも自己規律が求められる職業である。ところが門脇ら、昨今の東大医学部教授の振る舞いは、語源とは正反対。世論が批判し、他大学から論文撤回を勧告されても、一切の告白を拒んでいる。このままでは、年末には「門脇医学部長体制」が発足するだろう。そこにモラルはなく、「逮捕されない限り何をしてもいい」という風紀が蔓延することになる。明治以来、先人たちが築き上げてきた東大医学部の、金看板が穢れていく。（敬称略）